



整理券500円  
中学生以下無料  
粗品進呈

# 第12回桜公演

## 日之影町大人歌舞伎

県指定無形民俗文化財



日時：令和6年4月27日(土曜日) 午後1時開演  
場所：日之影町大人(おおひと)地区 歌舞伎の館



演目

- 一.寿三番叟 二.元禄忠臣蔵「南部坂雪の別れ」  
三.一谷嫩軍記流の枝「菟原の里林住家の段」

主催：大人歌舞伎保存会 後援：大人公民館、一般社団法人日之影町観光協会

問い合わせ

前日まで：一般社団法人日之影町観光協会 TEL：0982-78-1021  
当日：大人歌舞伎保存会長 山本唯仁 TEL：090-1514-1707

尚、当日の午前中に日之影フットパス「大人コース」を開催します。問合せは同上まで。

\*会場にてお弁当、飲み物等の販売も行います。

～伝統と感動あふれる迫力の舞台～ 春の一日を歌舞伎鑑賞でお楽しみください。

# 第12回桜公演プログラム

## 一、寿三番叟

《開演に先立つ祝儀の舞》

口上（座長 宮本卯午蔵）



## 二、元禄忠臣蔵「南部坂雪の別れ」



元禄15年12月14日、この日の夜半には主君浅野内匠頭の仇を討つべく吉良邸への討ち入りが決まっている。その雪の降る日、大石内蔵助は赤坂南部坂の浅野内匠頭の奥方であった瑠泉院の元を訪ねる。瑠泉院は吉良上野介に対する内蔵助らの仇討をいつかいつかと待ち兼ねている。瑠泉院の前で内蔵助は今宵の討ち入りを伝えるつもりで訪ねてきたのだが、居並んだ腰元の中に一人見知らぬ不審な者がいる。これでは大事を打ち明ける訳にいかない。内蔵助は仇討の意思など全く無いと言う。内蔵助を情けない男だと嘆く瑠泉院は部屋を出て行く。内蔵助は落合与右衛門に主君の仏壇に供えて欲しいと巻物を託し雪の中を去って行く。

与右衛門を残し皆が部屋を出て行ったあと、紅梅という娘が仏壇から巻物を盗み出そうとする。が、与右衛門からねじ伏せられてしまう。紅梅は上杉の間者であった。紅梅から奪い戻した巻物を開いて見れば、討ち入りの日、そして四十余名の赤穂浪士の名前が書かれている。与右衛門は慌てて瑠泉院を起こし、この連判状を見せる。

東の空が明るくなる頃、寺坂吉右衛門が瑠泉院の元を訪れて討ち入りの模様を告げ、見事、吉良の首を討ち取った事を伝える。忠義の義士の働きに瑠泉院は涙するのであった。

## 三、一谷嫩軍記流の枝「菟原の里林住家の段」



菊の前の乳母をしていた林は、今は菟原の里に一人住んでいる。そこに薩摩守忠度が訪れる。忠度は、菊の前の父藤原俊成に千載集に自分の和歌を加える様願い出たが、合戦が始まり須磨の平家陣所に帰る途中である。林は奥へと通した。

その後、この家に男が忍び入り、家宝の太刀を持ち出そうとする。が、林に取り押さえられて見ると、それは息子太五平だった。太五平は源平合戦で褒美を得ようと太刀を取りに来たという。しかし林は聞く耳を持たず太五平から太刀を取り戻す。そこへ人入れ稼業の茂次兵衛が来て林をなだめる。合戦の旗持ち役に太五平をと言うのである。それを聞いて林も機嫌を直し、太五平に太刀を渡し送り出す。林は茂次兵衛

に、世話になった礼に酒肴を用意し奥の納戸へと案内する。そこに来たのは菊の前であった。菊の前と忠度は恋仲であるが、忠度が都を立ったと知り、後を追いかけて来たのである。忠度が奥にいると聞いた菊の前は喜んで奥に入った。だが暫くして、菊の前は奥より飛び出した。忠度から暇を言い渡されたという。忠度も出てきて、平家の命運は尽き自分も討死する。だから別れ様と菊の前に話すが、例え討死しても忠度様にどこまでも付いて行くと菊の前は訴えるのであった。そこへ、手勢を率いて現れたのは、源氏方の梶原平次景高。忠度を絡め獲ろうとするが、忠度は手勢を投げ飛ばして寄せ付けない。その勢いに恐れをなし景高は手勢の雑兵と逃げ去る。そこに現れたのは、義経の家臣六弥太忠澄。六弥太は、義経より託された忠度の短冊を付けた桜の枝を差し出し、この短冊の和歌が千載集に入集したと忠度に知らせる。忠度は本意が果たせたことを喜び、六弥太とは戦場で再会し勝負することを約束、菊の前との別れを惜しみながらも須磨の陣所へ向うのであった。